

京都大学	博士（文学）	氏名	渡邊 蘭子
論文題目	後期アウグスティヌスにおける欲望の問題		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、後代に大きな思想的影響を与えたとされる西方教父アウグスティヌス（354-430）が、キリスト教徒に生じる癒し、特に欲望の癒しをどのように捉えていたかを考察するものである。彼は、後期のペラギウス派論争の時期に、洗礼を受けた「恩恵の下」にいるキリスト教徒であっても、地上的世界にいる限りは悪なる欲望に苛まれ続けることを強調した。中期において、ロマ書7章後半でパウロが語った悪なる欲望に苛まれるという事態を恩恵が未だ注がれていない「律法の下」の人間に生じることであると彼は見做していたが、後期になると、悪なる欲望に苛まれることは「恩恵の下」にいるキリスト教徒にも当て嵌まると考えるようになった。これに対し、ペラギウス派の論者、特にユリアヌスは、アウグスティヌスが神から与えられた恩恵の有効性を無効にしていると批判した。こうした批判は現代の論者によっても行われており、アウグスティヌスが、恩恵によって人間の意志が変えられ、喜んで善を行うようになることを説いていたにもかかわらず、恩恵の下でも悪なる欲望に苛まれ続けることを強調したために、恩恵の効力を十分に説けなくなったと指摘されている。さらに、現世にいる限り悪なる欲望に苛まれ続けるという彼の主張は、現実の状況を甘受し、人間の状態の改善を来世に持ち越してしまう考えであるとも批判された。</p> <p>しかし、こうした指摘は、アウグスティヌスの思想において極めて重要な意志の歪みの問題を十分に考慮しているとは言えない。彼の欲望に関する研究は、性についての関心が高まった1980年代から90年代にかけて盛んに行われたが、多くの研究は、アウグスティヌスが若い頃に信奉していたマニ教の影響を受けることで、身体性や欲望を蔑視するようになったと指摘するに留まっていた。だが、P. ブラウンをはじめとする幾つかの研究は、アウグスティヌスが悪なるものとして考えていたのは、身体性や身体に生じる欲望自体ではなく、精神における意志の歪みであった点を指摘している。こうした悪なる欲望の根本にあると考えられる意志の歪みについての分析を踏まえないければ、悪なる欲望の癒しに関する彼の考えを十分に解明することはできない。このことから、本論文は、意志の歪みの問題を主軸として扱いつつ、悪なる欲望の癒しに関するアウグスティヌスの思想を解明することを目指している。</p> <p>こうした解明のために、本論文は、ペラギウス派論争著作だけでなく、それ以外の異なる文脈のテキストも分析の対象としている。従来の研究では、後期におけるアウグスティヌスの悪なる欲望について論じる際、ペラギウス派論争著作が重点的に扱われ、特に性的欲望の問題が論じられたユリアヌスとの論争的著作が分析の対象とされることが多かった。しかし、そうした論争的著作を分析するだけでは、論争の文脈に</p>			

におけるアウグスティヌスの主張を把握するに留まり、包括的なアウグスティヌスの欲望に関する思想を把握することは困難である。したがって、本論文は、論争的著作以外の教義的著作や説教も分析の対象とし、教義的著作として、ペラギウス派論争の時期に書かれた『神の国』と『三位一体』を、また、説教として、同時期の『ヨハネ福音書講解説教』と『節制について』を扱っている。以下、各章の議論を概観する。

第1章では、洗礼後の悪なる欲望の問題が、後期におけるアウグスティヌスの思想の中でどのように位置づけられるのかが論じられる。ペラギウス派論争の前半であるペラギウスやカエレスティウスとの論争では、自由意志と恩恵の問題が集中的に扱われ、特に洗礼に関する議論の中で、洗礼後の悪なる欲望の問題が論じられた。彼らは原罪を否定し、人間の自然本性がアダムの罪によっても損なわれていないと考えていたため、洗礼を受けることによって悪なる欲望を克服できると主張していた。それに対しアウグスティヌスは、アダムから引き継がれた原罪のために、人間の意志は自由でないと考えており、そこから、洗礼を受けて「恩恵の下」にいるキリスト教徒であっても、現世にいる限りは悪なる欲望に苛まれ続けると主張した。その後起こったペラギウス派のユリアヌスとの論争でも自由意志と恩恵の問題は引き続き論じられたが、ここではさらに、結婚や性的欲望が議論の対象となった。ユリアヌスは、ペラギウスらと同様に原罪の教義を否定しただけでなく、性的欲望を神が創ったものとして善なるものであると主張した。これに対し、アウグスティヌスは、原罪によって人間の本性が歪んだために、性的欲望もまた歪んだものになったと主張した。それ故に、洗礼後であっても悪なる欲望に苛まれることを強調したのである。尚、同時期に行われた「セミ・ペラギウス主義者」との議論では、人間の意志の役割を強調する論敵に対し、アウグスティヌスは、人間は現世にいる限り悪なる欲望に苛まれ続けるため、洗礼後においても神の恩恵が必要であることを主張した。その背景には、彼自身が生涯を通じて悪なる欲望に苛まれる経験をしていたことが考えられる。

第2章では、アウグスティヌスが洗礼後の悪なる欲望の存在をどのように強調するようになったのかが分析される。この分析は、特に中期から後期にかけてのロマ書7章後半の解釈の変化に注目することによって行われる。彼は、中期において、現世の不完全性を認識しつつも、罪に関する聖書の当該箇所を「律法の下」の人間として考えていた。だが、後期におけるペラギウス論争では、その論点が神の恩恵による人間の意志の変革であったことから、神の恩恵によって喜んで善行をなせるようになる点が強調されており、さらに、ロマ書7章後半における霊肉の対立は、来世における復活した身体のもとで解消されることから、死すべき身体をもつ現世では「恩恵の下」においてもこの対立が生じると説かれるようになった。彼は、対立があることで恩恵の有効性が確保されていないとするユリアヌスの批判に対し、洗礼による恩恵によって悪なる欲望に同意しないことも可能になると説き、恩恵の有効性を確保しようと努

めた。また、「セミ・ペラギウス主義者」に対する著作においては、恩恵によって悪なる欲望を克服するためには、神に寄りすがって祈ることが必要であると語られており、ここでは具体的な倫理的実践を促せていないようにも捉えられる。

第3章では、アウグスティヌスが悪なる欲望の根源に意志の歪みがあると考えている点を分析する。性的欲望に関するユリアヌスとの議論において、アウグスティヌスが現世における性的欲望を歪んだものとして厳しく否定していることから、一見すると彼がマニ教のように性的なものや身体的なものを執拗に嫌悪しているように捉えられる。しかし、アウグスティヌスが用いる「欲望」を示す言葉（concupiscentia、libido、cupiditas）の用法の分析から、それらが否定的な意味だけでなく肯定的な意味でも用いられており、性的欲望だけではなく他の身体的欲望や、知識などの精神的な欲求をも意味することが明らかになった。ここから、彼が欲望を悪と見做す際に、性的欲望や他の身体的欲望だけを悪と見做しているわけではない点が考察された。さらに、『神の国』の分析からは、アウグスティヌスが悪徳の原因を身体性や欲望に帰しているのではなく、魂における意志の在り方に帰していることが解明された。彼は「神に従って」ではなく、「人間に従って」意志する「高慢」の意志こそが悪であると考えており、このことは人類始祖の罪が、神ではなく自らの力を信頼する「高慢」の意志から生じたと述べている点からも明らかである。

第4章では、『三位一体』の分析を通して、墮罪後における悪なる欲望のうちにある意志の歪みについて考察する。従来多くの研究では、アウグスティヌスが墮罪後の人間における悪なる欲望を罰として捉えている点を指摘するものが多く、墮罪後の悪なる欲望のうちにある意志の歪みについては十分に分析されてこなかった。確かに、ペラギウス派論争著作においては、墮罪後の人間が人類始祖の罪から生じた原罪の下にあり、墮罪後の人間が犯す罪の多くは、原罪の罰として生じることが強調されていた。したがって、悪なる欲望に苛まれることは、身体に生じるようになった受動的な罰として説かれていた。しかし、ペラギウス派論争の文脈から離れた『三位一体』においては、墮罪後の人間における悪なる欲望が、単に罰として身体に生じるようになっただけでなく、自己を正しく考えることができずに「高慢」になって神から離れるという、人間の意志に関わる問題としても考えられていた。墮罪後の人間は、人類始祖の罰によって感覚的・物的なものに親密になっており、そこから、神に従い、感覚的・物的なものを支配するという本性的な自己を考えることができなくなる。こうして高慢になった人間は神から離れ、結果として欲望に苛まれるのである。ここでは、墮罪後の人間における悪なる欲望についても、自己を正しく認識できずに高慢になってしまうという、意志の歪みの問題が根本にあると考えられている。

第5章では、上記の考察を踏まえて、悪なる欲望がどのように癒されるかが分析される。従来多くの研究では、アウグスティヌスが悪なる欲望の根本に意志の歪みを考えて

いる点が考慮されないまま、悪なる欲望の癒しについての分析が行われていた。そのため、彼がこの癒しについて積極的に主張している点も、その癒しのメカニズムについても十分に明らかにされてこなかった。特に、ペラギウス派論争著作の中で、現世における身体が腐敗性をもっているために、現世にいる限り悪なる欲望に苛まれるという点が強調されることで、彼が悪なる欲望の癒しを積極的に説けなくなっていると見做されていたのである。そこで本章では、悪なる欲望の根本である「高慢」がキリストの謙遜によって癒されることで、悪なる欲望もまた癒されることが説かれている点を明らかにする。アウグスティヌスは、『三位一体』において、悪なる欲望の癒しが生じる根拠に、キリストの謙遜の業である受肉・死・復活があると見做しており、『ヨハネ福音書講解説教』では、キリストによる悪なる欲望の癒しの具体例として、殺人、姦淫、盗みなどを行う悪なる習慣が改善されていくことを説いていた。ここでは、キリストによって癒されるために重要なことが、神に固着すべきであるという本性的な自己認識と、自己の罪についての認識であるとされている。第4章で分析したように、墮罪後の人間においては、神に向かうべき自己を正しく認識できないことが悪なる欲望の発生につながっているため、キリストによって促されることで、自己を正しく認識し、謙遜になって神に向かうことで悪なる欲望が癒されるのである。

第6章では、悪なる欲望に苛まれることとそれが癒されることとの関係を明らかにすると共に、喜びを伴った善行を行わせる恩恵の有効性がどのように確保されているのかが分析される。ペラギウス派論争著作においては、悪なる欲望に苛まれること自体が、否定的な意味をもつだけでなく、すべての悪の根本である高慢を防ぐという肯定的な役割をも担っていることが述べられていた。また、『節制について』でも、悪なる欲望に苛まれることがキリストという医者を求めることに繋がり、恩恵によって喜んで善を行えるようになると主張されていた。ここでは、身体性ではなく意志のあり方を重視するアウグスティヌスの見解が根本にあり、彼がペラギウス派論争の中で現世の不完全性を強調したことの背景には、現世における人間の改善を放棄したというよりも、むしろ自らの不完全性を正しく認識して謙遜になることが、人間の歪みの根本的な癒しに繋がるという考え方があったと捉えられる。同様に、「セミ・ペラギウス主義者」に対する著作の中で、彼が神に寄りすがって祈ることの重要性を強調したことも、人間の倫理的責任を放棄するのではなく、神に従う謙遜的な在り方が、むしろ倫理的な実践に繋がっていると見做される。上記のことから、彼はキリスト教徒に生じる救いを、「義認」と「聖化」が融合した動的なものとして捉えていると考えられる。というのも、アウグスティヌスによれば、洗礼を受けたとしてもキリスト教徒は悪なる欲望に苛まれるため、自らの弱さを神に告白し、恩恵を祈り求める—これは「義認」につながるあり方である—が、他方で、そうした謙遜な在り方によって、悪なる欲望自体が実際に癒されていく—これは「聖化」である—からである。

(論文審査の結果の要旨)

北アフリカのヒッポの司教アウグスティヌス(354-430)の思想は、古代末期の西方世界のみならず、中世以降のキリスト教世界において教理史的にも教会史的にも極めて重大な役割を担ってきた。彼は、386年にキリスト教に改宗した後、395年に司教に叙階されているが、430年に没するまで、キリスト教内外の複数の論争に巻き込まれた。これらの論争の主題に従って、彼の議論は大まかに三つの時期に分けて考えることができる。即ち、二元論的世界観を説くマニ教と論争した前期、洗礼や叙階など教会内部の秘跡の効力を巡ってドナティスト派と論争した中期、そして人間本性の完全性と原罪の在り方を巡ってペラギウス派と激しく議論を展開した後期である。古代の他のキリスト教思想家と同様、アウグスティヌスも論争相手によって同じ主題を異なった論点で扱うことがあり、場合によって、それは同時代ないしは後の時代の研究者によって立場の矛盾や思想の変化として説明されてきた。特に人間のもつ欲望や身体性に関する彼の議論には、中期と後期で異なる様相が見出され、未だアウグスティヌス研究において見解が定まっているとは言い難い。また、1970年代以降に発見された書簡集や説教集などの新資料も、彼の見解を捉え直す大きな契機となっている。

このような状況を踏まえた上で、渡邊論文は、アウグスティヌスの後期の議論に着目し、善で完全なる神によって創造され、洗礼を通じて神の恩恵さえも与えられた人間が、なぜ日々の生活の中で悪なる欲望に苛まれるのか、そして、それはどのような意味をもち、またどのように克服されうるとアウグスティヌスが考えていたのかを解明することを目的としている。アウグスティヌスの中期の思想では、少なくとも洗礼によって恩恵の下にある人間は、悪なる欲望を自力で克服する可能性が考えられていたが、彼の後期の思想においては、恩恵の下であっても人間はこのような欲望に苛まれ続け、終末や死後の復活における完成までその苦痛が続くことが強調されている。このような思想的変化は、一般的には、ペラギウス派との論争が大きな原因の一つであると考えられている。ペラギウス派は、人類を創造した神と、洗礼後の人間の自由意志に絶対の信頼をおくことで、恩寵の下であれば罪無き在り方で生き抜くことが可能であると説いていた。このような立場に対し、後期のアウグスティヌスは、たとえ神が善かつ完全であったとしても、原罪によって人間本性を損なった人類は、完全なかたちで自由意志を行使することはできず、洗礼後の恩恵の下であっても悪なる欲望に苛まれ続けると考えている。ここには、ペラギウス派の楽観的で傲慢とも言える人間観を批判するかたちで、アウグスティヌスの中に思想的変化が生じたとする解釈が成立している。しかし、本論文は、中期以降のアウグスティヌスの著作を精査するならば、このような変化は既に中期の著作において既に始まっており、ペラギウス派との論争以前に聖書研究や原罪論の考察を通じて悪なる欲望が終末まで続くことをアウグスティヌス自身が見出していた点を指摘している。

アウグスティヌスの思想的変遷の背景を批判的に考察した上で、本論文は、ここで

主題となっている悪なる欲望について、二つの特徴的な議論を掘り下げ、それが独自の視点として展開されている。一つは、悪なる欲望の背景に、人間の意志の歪みがあることを見出した点である。ペラギウス論争的著作だけでなく、『神の国』の議論と併せて考えるならば、アウグスティヌスはすべての悪しき意志の背景に、神に背き、自分を過度に誇る高慢があることを見出しており、その高慢によって、人間は神に固着する本来の秩序と自分自身に対する支配力を失い、その結果、魂と身体の調和が崩れ、身体の中に悪なる欲望が生まれたと考えている。ここには、従来、アウグスティヌスが性的欲望のみを悪として強調していたかに見える議論を批判的に検討した上で、悪なる欲望が生まれるメカニズムを神との関係という別の視点から分析することの意義が見出される。もう一つは、このような悪なる欲望を単なる否定的な要素と捉えるのではなく、悪の弱さ故に善に向かうことができるとアウグスティヌスが考えたことを考察した点である。確かに、欲望は救済に向かう障害となりうるが、神は悪なる欲望さえも善のために用い、このような欲望が洗礼後も人間に残存することによって、人間は自らの限界を知り、高慢になることを避け、完成に向かって努力し続けることができるとされている。本論文におけるこれらの視点は、必ずしも渡邊氏が最初に提示したものではなく、例えば2010年代に出版された海外の先行研究の中でも触れられていたものであるが、そこで不十分なかたちで展開されていた議論を本論文は詳細に至るまで検討し直し、アウグスティヌス後期における文脈の異なる複数の資料や、1970年代以降に発見された新資料を踏まえつつ、丁寧かつ慎重に議論を展開している。これらの分析によって、アウグスティヌスにおける人間の欲望、特に洗礼後の恩寵の下にあるキリスト教徒に生じる悪なる欲望の概念は、アウグスティヌス研究において独自の視点を与えられたと考えられる。

このように、本論文は、近年の宗教研究およびキリスト教思想研究の分野でも重視されつつある身体と欲望に関する議論に正面から取り組み、関連する先行研究を幅広く踏まえながら独自の観点で掘り下げつつ、複数の原典を丁寧に分析しており、評価すべき点を多くもっている。他方で、ヒラリウスやアンブロシウスなど、アウグスティヌス以前の思想家との議論の差異や影響関係、および3世紀からセミ・ペラギウス主義の時代までの西方世界における今回の議論の思想史上の位置付けなど、今後の課題と見なすべき点も指摘されうる。しかし、こうした問題点は本論文の意義を著しく損なうものではなく、今後の研鑽において克服することが十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年9月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。